



多くの業界関係者で賑わう展示商談会会場。様々なチャレンジを目指して対話が盛り上がる



上) SDGsとサステナブルをテーマにシンポジウムを開催
同下) イベントは万全な新型コロナウイルス感染症対策を講じて行われた

ポストコロナ時代の新たな挑戦へ 「サステナブル」シンポ盛況、展示商談会も活発に

ツーリズムEXPOジャパンの会期2日目となった9月23日は、メインテーマである「新しい時代へのチャレンジ」に向け、海外旅行、国内旅行、インバウンドなどそれぞれの場を通じて、多数の業界関係者がビジネスチャンスを探った。

4年ぶりとなる東京開催の展示商談会では、多くの出展企業・団体が強い期待感と共にウィズコロナ・ポストコロナを見据えた新しい観光資源の開拓や取り組みを紹介した。旅の楽しみ方の多様性やサステナビリティに配慮した、従来の観光とは一線を画す新たな旅行スタイルの提案について、出展者からは「水際対策も緩和が進んでいる。一般日では、新しい旅の機運が高まっていることを訴

えたい」との声が上がった。国内旅行ブースでは、全国旅行支援の決定を受けて積極的なムードが広がった。ワーケーション、アドベンチャーツーリズムといった特集エリアも商談の列が途切れず、関心の高さを伺わせた。メタバースやVR、農泊地域と会場をオンラインでつないだプレゼンテーションなど、最新テクノロジーを活用したコンテンツも進化する産業の今を象徴した。

未曾有のパンデミック危機を経て、世界の観光産業で注目が高まったのが、持続可能なまちづくり、環境保護、文化・自然資源の保全といった、ポストコロナに選ばれる観光地への取り組みだ。今回のシンポジウムはまさにSDGs、サステナブルをテーマ

にしており、和歌山大学観光学部の加藤久美教授は基調講演でトレンドやアプローチ方法に言及し、魅力的な商品を手がけることがスタッフのモチベーション向上につながるとも指摘した。また東洋大学国際観光学部の古屋秀樹教授は、SDGsと教育旅行をテーマに「旅行を通じて地域の自然・社会を新たに学べ、自己達成感が充足できる」と意義を説明。コロナ禍による教育旅行の変質を踏まえたカーボンスタディツアーや地球温暖化問題など、地域の具体的な事例に多くの参加者が耳を傾けた。

次回2023年は10月26～29日に大阪で開催される予定で、2025年の「日本国際博覧会」(大阪・関西万博)に向けて弾みがつきそうだ。

サステナブル・ツーリズム・シンポジウム | ～ポストコロナに選ばれる観光とは～ 今日から始められるサステナブルツーリズム

観光サステナビリティの根幹は地域の知恵と 価値観の深耕

■基調講演



和歌山大学観光学部 教授
加藤久美氏

富裕層だけのものではなく高価である必要もない

ポストコロナに向かいつつある今、「回復」がキーワードとされ、その周囲にリジェネラティブやレジリエント、レスポンスブルといった言葉が並んでいる。この状況でサステナビリティに取り組むことは、社会に変革をもたらすものだ。

観光におけるサステナビリティとは、社会・環境・利益(豊かさ)に連携と平和を加えた5要素のバランスが取れていることだ。また、コロナ以前の急成長による弊害の反省から、サステナブルなツーリズムの必要性が高まっている側面もある。観光の「光」は、訪問者だけでなく誰もが受けるべきものであり、地域の知恵や価値観を重視したツーリズムこそがサステナブル・ツーリズムの根幹なのだ。

消費者の意識も変わってきた。旅行中、自然だけでなく地域や地元生活者に配慮する旅行者が増えている。良いものだけを提供すれば、こういった意識の高い人が訪れてくれる。ただし、富裕層だけのものではなく、高価である必要もない。現在サステナビリティ関連の認証制度は400以上ある。成長や向上を支援してくれるものやシステムに透明性があり信頼できるものといった観点で選ぶのがよいだろう。サステナビリティへの取り組みは、スタッフのモチベーションを高めることにつながる。対応することで旅行者に選ばれるようになれば、大きな変革につながると信じている。

地域の、地域による、地域のための観光を

加藤教授の基調講演に続きサステナブルツーリズムに取り組む3者によるパネルディスカッションが、中山氏の進行で行われた。北海道宝島旅行社の鈴木氏は、コロナ禍前から旅行者数も単価も頭打ちになる中、北海道の優位性を活かせる「海外富裕層向けのアドベンチャートラベル、地域の自然や文化を楽しむ旅行」に照準を合わせた。観光マネジメントは地域主導、マーケティングやPRは地域外の専門家の力を借りることが重要と話す。

2021年に国際認証団体トラベライフ(Travelife)のパートナー登録を取得した。

2009年に、日本で初めて宿泊施設向けの認証グリーンキーを取得した扉ホールディングスの齊藤氏は、信州の山の中で、自然災害の影響を受けてきたことが、持続可能な観光に着目し、「住み続けられる地域をデザインすること」を目指すきっかけとなった。1980年代から生ごみのリサイクルや水を循環させる冷却施設などを導入。建物には土に返る素材を使い、電気自動車での来訪者には割引料金を設定してきた。

一方、宿泊施設向けの認証制度を展開しているブッキングドットコムジョン氏は、7年前から実施している調査で「持続可能な施設が見つからない」との声を受け、「サステナブル・トラベル」バッジ認証をスタート。バッジを取得した宿泊施設は、利用客からのレビュースコアが高くなる傾向があり、これがサイト内での掲載順位や転換率アップにつながっていると指摘。訪日インバウンド客が戻れば、欧米旅行者層からも注目されやすいと話す。

■モデレーター



日本政府観光局(JNTO) 理事
中山 理映子氏

■パネリスト



扉ホールディングス株式会社
代表取締役社長
齊藤 忠政氏

■パネリスト



北海道宝島旅行社
鈴木 宏一郎 氏
株式会社北海道宝島旅行社
代表取締役社長
鈴木 宏一郎氏

■パネリスト



Booking.com Japan 株式会社
東日本地区 エリアマネージャー
ジョン・オリビア氏

サステナ認証取得が人材確保にも貢献

後半、中山氏が「サステナブルには幅広い内容があるが、特に力を入れていることは？」と問うと、齊藤氏は「地域と共に生きること。価値観の共有」、鈴木氏は「顧客満足度だけでなく、従業員の満足度が大切」を挙げた。

また「認証取得での苦労」については、「日本では常識的な内容でも、認証を付けることに意味がある」(鈴木氏)、「仕事が増えるので、スタッフから理解してもらうのが一番大変だったが、新入社員獲得につながったり、改善点や次の目標などが分かる指標として役立っている」(齊藤氏)。

最後に中山氏は「地域の、地域による、地域のための観光を、という力強いメッセージだった。大風呂敷を広げる必要はなく、小さくてもできる事から一つ一つ実践するべきと感じた」と締めくくった。



VISIT JAPAN トラベル& MICE マート (VJTM) 2022 海外バイヤー56名がリアル参加

訪日旅行を扱う海外バイヤーと、日本全国の観光関係事業者によるインバウンド商談会が9月22～24日の3日間、オンラインとリアルハイブリッド形式で開催された。



商談を通じて様々なインバウンド関連ビジネスの創出へ

国内セラーが218団体、MICEバイヤー22名を含む27カ国・地域の海外バイヤー256名が参加し、このうち56名の海外バイヤーが来日して、会場でリアル商談を実施した。

持続可能な観光推進シンポジウム | SDGsを踏まえた新しい教育旅行の今後に向けて

体験的なSDGsの学びが求められる時代に

■基調講演



東洋大学国際観光学部 教授
古屋 秀樹氏

総合的な判断力を養う教育が必要

学習指導要領では、旅行・集団宿泊的行事(教育旅行)は経験主義的教育に役立つものとされている。総合的な探究の時間との関連では、その過程で課題発見と解決に取り組むことは自己学習につながる。その意味で「SDGs」「持続可能性」は、旅行テーマとして有効だ。

SDGsに関しては、気候変動や防災、クリーンな経済手段など、具体的に実現するための指標も重要な概念だ。旅行関連では、観光庁の「日本版持続可能な観光ガイドライン」に基づき、着地として考えるべき課題について、現状を評価するモニタリングが各地で精力的に行われている。

一方で、残念ながら日本では気候変動に対する危機意識が低く、気候変動に対して行動を変化させた人も少ないという調査結果がある。だからこそSDGsに関する教育が必要で、教育旅行はこれらのテーマを考える第一歩になるし、単にSDGsに取り組むのではなく、行動の目的を考えるきっかけにもなる。自分が選択する行動によって生じるメリットとデメリットにも目を向け、総合的に判断できるようにする教育が必要だ。

今は地球温暖化の観点から不可逆的な状況に陥るかどうかの転換点だ。教育旅行を通じて地域と自分のつながりを学ぶことは、自己達成感の充実を図り、従来の「経済・現状」から「環境・将来」という価値判断基準のパラダイムシフトにつながると考えている。

重視される「探求学習」、SDGsを支えるESD

主催者挨拶で、久保田氏は会場に教育関係者も多く参加していることに触れ、「コロナ禍で中止や延期となった修学旅行の重要性が見直され、多くの学校で再開されている。今後は体験的なSDGsの学びを盛り込むことが求められる」と述べた。

基調講演に続く基調発表に登壇した高野氏は、コロナ禍の2020～22年に行われた小中高の学習指導要領の改定で「唯一の正解が存在しない課題を考える『探求学習』が重視されている」として、「今後は教育旅行にもそうした要素が求められる」と述べた。またESD(持続可能な開発のための教育)という概念について紹介し、ESDは持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を培うための教育を意味し、「日本が提唱して国連で認められた考え方で、2019年の国連総会決議では『教育がSDGs全てのゴールを達成するための鍵である』

とされた(高野氏)。

高野氏は「ESDはSDGs全てのゴールを下支える存在。文科省はESDを重視しており、中間目標であるSDGsが2030年にゴールを迎えた後も重視されるだろう」とその重要性を指摘した。

着地と発地、それぞれの取り組み

事例発表は「着地」「発地」の各代表2名に登壇し、着地側として坪田氏から福井県のSDGsプログラムの事例が紹介された。その一つの「若狭de海ごみ」は、海の漂着ごみを回収して分別調査し、減量の取り組みを自分で考え、最後は集めたごみをアクセサリなどに加工して生まれ変わらせるというもので、坪田氏は学校への支援策として「事前・事後学習を含めた探究学習用のワークシートを用意している」と述べた。

発地側として登壇した中島氏は、KNTが独自開

■主催挨拶



公益社団法人日本観光振興協会
理事長
久保田 穰氏

■基調発表



旅行協会
公益財団法人日本修学旅行協会
常務理事・事務局長
高野 満博氏

■事例発表



公益社団法人福井県観光連盟
専務理事
坪田 昭夫氏

■事例発表



近畿日本ツーリスト株式会社
豊橋営業所 チームリーダー
中島 ゆか氏

発したカーボンスタディツアー「Think the Blue Planet」について紹介した。同ツアーは、音楽家の坂本龍一氏が代表を務める森林保全団体との連携により、ビンゴを使いゲーム感覚で、移動・宿泊など旅行中の行動を通してカーボンオフセットに取り組める教育旅行プログラム。中島氏は体験による効果として「自分の課題感が新たにアップデートされ、探究の過程が繰り返される」と述べた。

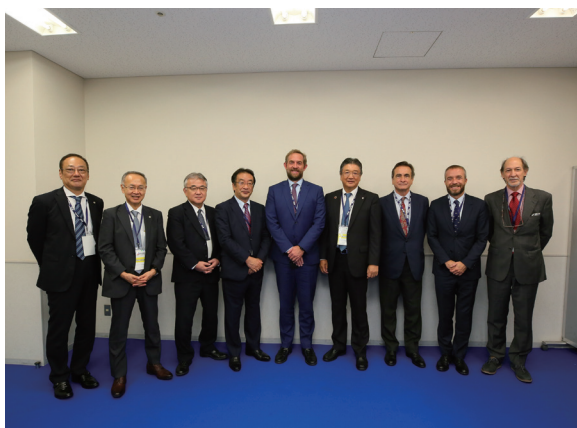
修学旅行全体で大きな学びのストーリーを

最後は古屋氏が進行役を務め、登壇者3名によるクロストークが行われた。中島氏はカーボンオフセットの取り組みについて「日本の誇るおもてなしとは逆行し、単にサービスの省略と受け取られる可能性があるため、消費者への理解促進が必要」と述べ、坪田氏は探究学習の支援策として「生徒たちの事前学習に役立つよう、我々のホームページをわかりやすく情報を充実させることも大事だと思っている。学習の『タネ』をたくさん仕込んで生徒たちのアウトプットを手伝いたい」と述べた。

最後に高野氏が「修学旅行が全て学びだけでは疲れるので緩急が必要で、食べたり体験したり、楽しみながらバランスよく学ぶことが大事。またポイントの学びではなく、数日間を通した大きなストーリーでの学びがあると望ましい」というコメントで締め括った。



23日フォトスケッチ



多数の海外要人にご来訪いただきました

TEJ 2日目には各国駐日大使をはじめ、観光行政トップ、観光機関幹部など、以下の方々の表敬訪問を受けました。

スペイン王国政府観光庁長官、韓国旅行業協会会長、駐日イタリア大使、タイ国政府観光庁副総裁、南部アフリカ開発共同体(駐日ボツワナ大使、駐日ナミビア大使)、ウズベキスタン共和国副首相 兼 観光文化遺産大臣、駐日チュニジア大使、チュニジア観光連盟、UNWTO本部賛助会員部本部長、タジキスタン政府観光開発委員会、インドネシア共和国観光クリエイティブエコノミー省本省マーケティング総局長



業界日2日目、雨ながら多くの来訪者があった

GOOD LIFE フェア2022

新しいライフスタイルによる豊かな生活を提案



“心地良く豊かな一歩先の未来”をコンセプトに初開催

朝日新聞社は9月23～25日、「GOOD LIFE フェア2022」を同時開催。テーマは「明日(ミライ)のために、今日(イマ)からグッドライフ」で、衣食住を中心とした6カテゴリーと「SDGs マーケット」で構成。自然と向き合って生み出した雑貨など、魅力的な商品が展示・販売された。話題のオンライン診療など体験コーナーの企画も盛りだくさんで、多くの家族連れでにぎわった。さらに、滝川クリステルさん、さかなクンなど、ゲストによるステージトークも会場を盛り上げた。



2025年開催の大阪万博に向けカラフルなブースでアピール



フィリピンブースで記念撮影



市場回復に向けクルーズの安全性と魅力を再確認(ツーリズム・プロフェッショナル・セミナー)

観光ビジネスに関わる情報と関係者が集結する総合観光イベント



ツーリズム EXPO ジャパン 2023 OSAKA・KANSAI

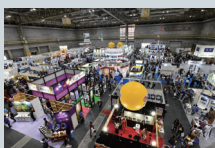
「ツーリズムEXPOジャパン
2023 大阪・関西」
出展のご案内

2023年

10/26(木) - 10/29(日)

会場 INTEXX OSAKA (インテックス大阪) 来場者数 (見込) 130,000人(業界50,000人、一般80,000人)
主催 公益社団法人日本観光振興協会、一般社団法人日本旅行業協会、日本政府観光局
共同開催/トラベルソリューション展2023(予定)、GOOD LIFE フェア2023(予定)

「ツーリズムEXPO ジャパン」は、新しい時代のツーリズムをリードする総合観光イベントとして、「持続可能な観光～サステナブルツーリズム」を推進し、さまざまな“新しい旅のカタチ”の情報発信をサポートしていきます。



ツーリズムEXPOジャパンに出展する
5つの“メリット”

1 西日本の玄関口、関西3空港などを擁する大規模商圏であり、国内旅行・海外旅行・訪日インバウンドの質の高い商談が可能

2 近畿圏のみならず、首都圏・関東エリアを含む全国から旅行会社バイヤー(昨年実績: 645社)が参加、2日間、事前マッチングによる商談が可能
※ツーリズム EXPO ジャパン 2019 大阪・関西実績より

3 展示商談会で直接交流によるリアル商談と、インターネットを介したオンライン商談を選択することが可能。出展ニーズに合わせた商談ができる

4 各地の特長を生かした、新しい旅のスタイルを関西圏の一般来場者に直接アピールできる絶好の機会(来場予想8万人)

5 日本政府観光局が主催する訪日旅行商談会「VISIT JAPAN トラベル&MICE マーケット(VJTM) 2023」と合同開催。※予定

ツーリズムEXPOジャパン推進室 [住所] 〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-3-3 全日通霞が関ビル4F [電話] 03-5510-2004 [FAX] 03-5510-1012 [E-mail] event@t-expo.jp